

吾が町が護る 戦没者のご遺骨

松村 興延 陸自64

都内山手線池袋から西北へ東武東上線急行電車で約40分、途中駅の坂戸駅で乗り換え17分で終点の越生駅に着く。この地は外秩父山地が関東平野の端に接し、約7割が山地で、人口減少、住民高齢化を憂い始めている町である。

越生駅ホームの中程に町内のハイキング名所紹介の看板がある。山吹、梅、ツツジ等の見所に並んで「世界無名戦士の廟」の文字が記されている。その廟はホームから西へ1km、標高300mの大観山頂上に見える。丁度稲田に降り立った鷹の様に、白い鮮明な姿を見せている。

最初この光景を見たのは、この町に転居してきた15年ほど前だった。この田舎町に何故「世界無名戦士の廟」があるのか、その由来を知りたいと思っただが、周囲の人から明快な由来を聞くことは出来なかった。新開の団地であり、周囲の人は筆者と変わらないこの町の新参者であったからだと思っ。

今年春になって、廟と町役場に近しい薬局の老婦人から聞くことができた。

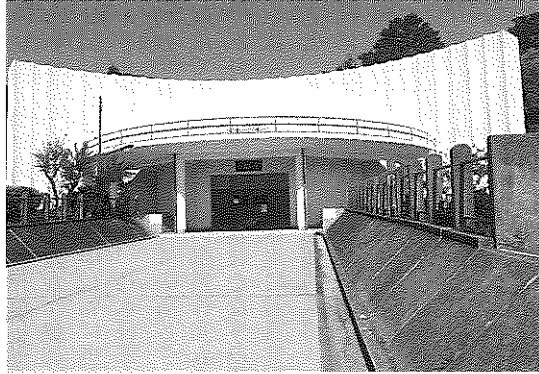
終戦後間もなくこの町から埼玉県議会議員に当選された長谷部秀邦氏という医師の方が、呼び掛けて建立された墓だと教えられた。そして詳しくは、町役場に担当係りがいることを聞き、翌日町役場を訪ねた。

担当は、町の会計担当者中島義仁氏で、事前予約無しでの訪問を快く受けて頂けた。ご挨拶もそこそこに、早速焦点を三つに絞ってお尋ねした。

一つ目は、長谷部氏が「無名戦士の墓建立」を発願された経緯である。

発願は昭和24年、日本が敗戦にうち

ひしがれた時からそれほど時を経ていない。それどころか、占領軍の「対日政策」が吹き荒れていた頃であり、そ



の前年12月23日深夜には、かつての日本の指導者7名が巣鴨で落命されてから日も浅く、国中が戦死者追悼の慰霊施設の建設を、軍国主義復活の印として連合国から睨まれるのではないかと、疑心暗鬼に陥っていた頃ではなからうか。

その様な風潮の中で長谷部先生は、昭和22年4月に埼玉県会議員に当選し、県庁分庁舎の一室に県内出身の戦没者ご遺骨が保管されている様子を目のあたりにされ、24年10月に「埼玉県出身戦没者遺骨安置施設建立」を発願された。

翌25年には元総理、当時の埼玉県知事、現・元国会議員、識者等44名を糾合して「建設委員会」を組織化。26年には衆参議員に「世界無名戦士の墓建設」を請願され、年内に採択された。

この「世界無名戦士の墓」として発願された経緯について、筆者の深奥に抱く疑問がある。

「戦没兵士の墓」でなく「世界無名戦士の墓」とされた理由は何かである。まず発願の最初の端緒に県庁分庁舎に保管されていた行く先のないご遺骨に心痛められたとある。

長谷部先生の孫の長谷部操様の一文にある「先生は終戦前から出征兵士の無事帰還を念願し、また5歳の孫が満洲で集団自決で落命された」こと等か

ら、埼玉県出身戦没者の追悼の心は霊廟建立の主な動機に違いない。

他の人が残した、「廟建設の由来」の一文に、「マッカーサー元帥の占領地治下軍国主義再現の誤解を招くおそれが多分に考えられますので：中略：彼我の英霊を祭って世界の恒久平和を念願する平和の殿堂を建設するという名目で：後略」とある。

しかし操様は直接に先生の呟きを聞いている。それは「敵兵も又、国を守る事を念じて命を捧げたのだ」「亡くなった将兵には高官も下級兵士もない」の二つだった。

これこそ先生の心に膨らんだ「世界無名戦士廟建立」、「世界平和を希求する祈り」ではなかったか。

長谷部先生の苦衷の妥協を拝察したのである。

二つ目は、建立に関わる費用の捻出について。先ず「廟建設の請願衆参議員採択」。次いで「財団法人世界無名戦士の墓建設会」設立認可を受けた後、時を置かず先生は、町内如意地区のご自分の持ち山を売却され、その資金で同じく町内の景勝の地・大観山を購入され、財団に寄付された。

建設経費は当初1千1百万円と予定され、広く募金を募ることとされ、全国小中生から5百80万円が集まったが、勿論足りず、長谷部先生は募金に

行脚された。大宮駅、熊谷駅などで「これから乞食（こつじき）に行つて参ります」と挨拶される先生の姿をお見かけした方々の談話も幾つかある。

また、越生地内に繁茂する路を採集、醤油と酒で煮付けし「キャラ路」として都内でお孫さんの操様も売り子に立って即売会を開き、或いは古賀政男氏、淡谷のり子氏、明治大学マンドリンクラブ等、一流の出演者の参加を得たチャリティショーを開き、それらの売り上げを建設費に繰り込まれたとの話も残っている。

それでも残る不足額を補う為、用地内の樹木伐採作業は町民有志、延べ1千8百人により、敷地造成は保安隊（後の自衛隊）のブルドーザー投入の整地作業で補い、建設工事施工業者柴崎工務所は利益度外視で、30年12月8日竣工した。敷地面積約4千平方メートル、白色の靈廟建坪一階（130平方メートル）、二階（30平方メートル）、三階（30平方メートル）が完成し、30年12月8日、盛大な落慶式が挙行された。

現在は、ご遺骨を引き取る縁者のない269柱が納骨堂に納められ、終焉の眠りにつかれています。

その後2度の道路新設改修、参道階段新設工事、桜花、サザンカ等花樹の生長を経て、今日の姿になった。

三つ目は、現在・未来への慰霊の継承である。

昭和57年には「世界無名戦士之墓建設会」を「世界無名戦士之墓顕彰会」と名を変え、その会長に過去何人もの越生町長が就任し、事務局を越生町役場に置いている。

これが意味することは「世界無名戦士の墓」施設管理と、年々の慰霊を町役場が責任を持つことの決意ではないか。

今年も5月第2土曜日に慰霊祭が行され、稚児行列の後、町長新井雄啓氏主催の下、町内外来賓及び町内各区区長参列の式典が挙行された。

夕方から関東で一番早く、田舎町では珍しい規模の花火大会が行われ、町役場前の駐車場に百を数える夜店が並び、町内外から多くの老若が花火を楽しんだのである。

往時を記憶し、今なお慰霊の心を抱く老齢の人ばかりでなく、戦いの日々を知らず、慰霊の心に関心の少ない若い年代の人たちも、花火を仰ぎ楽しむのである。その花火に、国のためを念じて散華された戦没者への追悼の祈りが込められている事を、いつか気づくに違いない。

花火が終わった後、町が続ける来年で以降も末永く、慰霊の花火を期待しながら、人々は家路を辿ったのである。